

第十九章 交代のドラマ

大平を退けた佐藤政権は、この頃が最も好調な時期であった。改定から十年を經過した日米安保条約の自動継続が波瀾なく進む見通しがたち、昭和四十五年三月十四日から大阪で開かれた万国博覧会には各国首脳が続々来日して、国内は泰平ムードにつつまれていた。佐藤首相は訪米時（総裁選挙は）三回もやれば十分だ。自民党には（後継者は）つぎつぎ生まれているから」ともらし、暗に四選には出馬しない意向をほめかしていたが、四十五年にはいるとにわか佐藤四選をめぐる動きが活発化してきた。

『待ちの政治家』と言われた佐藤首相は、この問題についても党内情勢が熟するのを待つ形をとり、みずからは何も明らかにしなかったが、主流派はさきに戻り咲いた川島副総裁、田中幹事長を軸に、沖繩返還時には日米交渉の当事者である佐藤首相の存在が必要である」として、佐藤四選へ党内各派をまとめる方向にリードしようとしていた。しかし、主流派の中でも、この頃田中幹事長と並んで急速に浮上してきていた福田蔵相への禅譲を意図している保利官房長官らは、『佐藤四選がなければ、ポスト佐藤は福田で固まる』と考へ、佐藤に四選を思い止まらせようとしていた。福田に肩入れする岸信介元首相も、弟栄作の四選は好ましからぬものと見ていたといふ。

佐藤首相はこの段階では保利官房長官の見解をとり、訪米後解散のみちを選んだ。だが、沖繩返還交渉のめざましい成功がかえって佐藤に自信をつけさせ四選決意へとつながって行くこととなったのは、歴史の皮肉と言ふべきであらう。

川島、田中を軸とする佐藤四選工作は着実に進行し、中間派の実力者船田中、水田三喜男、石井光次郎らがいち早く支持を表明、中曽根康弘も同調に動きはじめた。

総裁公選の党大会はこの年（昭和四十五年）の十月二十九日に決まり、党内の大勢は「佐藤四選」でほぼ固まったが、二年前の総裁公選のさいに挑戦した三木武夫、前尾繁三郎の二人がどういいう出方をするかが、この年の夏から初秋にかけての政局の焦点となった。三木の立場は明快だった。七月の記者会見で「首相は心身ともに疲れている。一九七〇年代を考えた時、引退するのが首相のためである」と述べたのにつづいて、九月に開かれた三木派研修会では、「党内に『もの言えは損をする』という風潮があるが、いまこそ政党政治の原点に立ち戻り、自由な討論で新鮮な活力を取り戻さなければならぬ」と四選阻止の態度を表明、あくまで戦う構えをとった。

だが、佐藤四選問題にどう対処するかは、保守本流中の本流としてつねに総裁公選には候補者を立てることを建前としている宏池会にとっては、容易ならざる問題であった。二年前の総裁公選では「人心一新」の名目の下に、三木とともに佐藤三選阻止を目指して立候補した前尾宏池会会長であったが、結果的には最下位の九十五票にとどまり、派内に深刻な論議をひきおこした経緯がある。加うるに、党内外に「沖繩返還交渉の総仕上げは佐藤首相の手で」というムードが圧倒的に強く、三木を除いて表むき佐藤四選に反発する空気は見られない。

他方、四選派の非主流派への働きかけは極めて活発で、なかでも前尾会長および宏池会への働きかけは執拗をきわめた。田中幹事長は同じ三役仲間でもある鈴木善幸総務会長を通じて、また川島副総裁は直接に、前尾に接触して、それぞれ佐藤四選への協力を要請した。

前尾会長は、これより先の昭和四十五年七月六日、箱根で開かれた宏池会の青年研修会での講演で、「公害問題などの社会的アンバランスが起きているのは、民間の経済成長にくらべて公共投資が遅れているからだ。遅れを取り戻すためにも、もっと積極的な公債政策をとるべきだ」と佐藤内閣の財政政策を批判し、「新しい酒は新しい革袋に盛らなければならぬ」

と党の体質改善を強調した。この前尾発言は、一見、佐藤政権批判のようにも見えたが、実は福田財政批判ではないかとの受け取り方もあり、佐藤四選問題に対し、和戦両様の構えを示した一つの布石的な発言と受け取るむきが多かった。

事実、前尾会長は、この箱根発言の二日後、記者団の質問に答えて、「総裁選に出馬するかどうか、何も言えない。現在いろいろと考慮中である」と述べている。

前尾会長が『考慮』していた中身は、川島、田中の四選派が前尾や宏池会幹部に示していた申し出であった。それは次のような構想であったと言われる。すなわち、第一は、佐藤四選後に改造人事を行う、第二は、そのさい前尾は主要閣僚として入閣する、第三は、四選後の佐藤政権では前尾派の考え方をよく反映させる、というものである。この構想は、

『佐藤四選はあっても五選はないのだから、このさい事実上の副総理格として前尾が入閣し、そのあと佐藤派の協力を得て前尾政権実現を期する、という前尾周辺および宏池会古参議員の戦略論とほぼ合致する内容であった。

大平は、大蔵省、政界を通じての先輩であり、池田の弟分であった前尾について論評することをそれまで慎重に避けていたが、この頃新聞記者のインタビュウに答えて、珍しく、『前尾論』を述べている。

「……ぼうようたる大人物、欲のない人、人格的には立派な人だ。しかし健康からいっても、また性格、性向からいっても、国民のかっさいを浴びたり、党内の多数派工作に向く人ではないね。だから天下人にはなれないかもしれない。しかし、それは彼の人格を落とすものではない。」（『北海道新聞』昭和四十五年八月二十一日付）

記者はこのインタビュウ記事に「大平氏周辺では前尾氏からの早期バトンタッチを強く望んでおり、前尾 大平不仲説も聞かれるだけに微妙な発言だ」とコメントをつけている。

この大平の前尾評は、彼としてはかなり正直なところであろうが、いやしくも総理・総裁派閥の長たる前尾がこれを読んで、愉快な気持になれようはずがない。そして前尾と大平の間が相変らずこのような関係であることは、佐藤首相にとつてはまことに都合なことであった。

ところで、九月二十二日に行われた佐藤・前尾会談で、前尾が佐藤に四選の意志があるかどうかをただしたのに対し、

佐藤は「(四選を) 決意するについては君の協力を求めなくてはならない。自分もやる限りは漫然と仕事はしない。君には入閣してもらうつもりだが、健康は大丈夫かね」などと述べ、暗に四選直後に改造人事を行い、前尾入閣を要請する意向を示した。

こうして、前尾は総裁選の立候補を断念し、佐藤にとって対立候補は三木武夫ひとりとなった。宏池会の中堅・若手議員の中には、「われわれはいまだかつて『佐藤栄作』という名前を投票用紙に書いたことがない。三選に反対しておきながら、戦略とはいえ、四選を支持するのはスジが通らぬ」という声があがったが、前尾自身に出馬の意志がない以上、前尾擁立をはかることはできない。結局、佐藤四選支持の方向が固まってしまった。

十月に入って佐藤首相は国連総会出席のためニューヨークに向かい、ついでワシントンでニクソン米大統領と会談して帰国したのち、十月二十九日の党大会における総裁公選にのぞんだ。焦点は、佐藤批判票がどれだけ出るかであったが、その結果は、投票総数四百八十一、佐藤栄作三百五十三、三木武夫百十一、ほか三、無効十四となった。党大会では、党内の批判票を集めて善戦した三木の百十一票が話題となった。

佐藤は、党大会が閉幕するさいに、会場の文京公会堂の壇上で川島副総裁に対して、小声で「ちょっと、改造は見送りましょう」と話しかけ、川島を驚かせた。この話が即座に各方面に伝わらなかつたのは、党大会の引け際であったためゴツタ返していたこと、またこのあと党大会直後に首相官邸で開かれる恒例の総裁招待パーティーに向かうため、みんなが車に乗ってしまったことなどの事情があった。

党大会が終わって真先に官邸に戻った佐藤首相は、秘書官に対して、前尾が官邸に到着したら首相執務室に招くよう指示した。間もなくやってきた前尾は、執務室に案内され、佐藤・前尾会談が始まった。佐藤は「ちょっと考えたいことがあるので、このさい改造人事に手をつけるようなことはしたくない」と改造見送りを表明、若干のやりとりののち、わずかに十分間で会談は終了した。

佐藤・前尾会談が開かれたという話をきいた報道陣は、会談後、パーティー会場に姿をみせた前尾を取り囲んだ。

「改造人事が始まったのですか」

前尾はウイスキーの水割りのグラスをグイと飲み干すばかりで、何も答えない。やがて、どこからともなく、改造見送り説が伝わりはじめた。

前尾は宏池会に引き揚げ、ここではじめて佐藤・前尾会談の結論にふれ、「改造は見送りになった」と語ったため、宏池会は八手の巢をつついたような騒ぎとなった。

前尾会長が改造見送りを事実上了承してきたことに対し、宏池会の中堅・若手議員の間から猛烈な反発の声があがった。ただちに開かれた宏池会緊急議員総会では、まず田中六助が起ってカベに掲げられている故池田前首相の写真を見上げながら言った。

「池田派が継続されていく限り、私はこの派に骨を埋めるつもりでいたが、今日という今日はカンニン袋の緒が切れた。佐藤さんが約束をホコにしたとき、前尾さんはなぜ『同志の皆さんと相談してから』と言わなかったのか。前尾さんの役割は佐藤さんのわがままをチェックすることにある。それなのに、改造の匂い薬をかがされた上、利用するだけ利用されたのでは、もう我慢ができない。私は前尾さんとたもとを分かち、もう二度とここへは足を踏み入れないだろう。」

田中は、涙をふきながらドアを開けて退席した。

二日間にわたる宏池会緊急議員総会では、田沢吉郎、服部安司、佐々木義武、伊東正義らが相次いで発言し、「九月二十二日の佐藤・前尾会談で事実上の政策協定を結び、同志が一致して佐藤首相に投票したのに、結果は首相に裏切られた。わが派は党役員、閣僚全員の引揚げを行うべきだ」、「前尾さんは首相にだまされたのだから、その責任をとるべきではないか。派閥も弱体化しており、体制・体質を早急に刷新する必要がある」などの意見を述べた。

宏池会内の中堅・若手の会合である木曜会（代表浦野幸男）のメンバーは、関係者の中で「会長室」と呼ばれていた宏池会の奥の部屋に集まり、前尾会長の責任追及
退陣要求を申し合わせる動きさえみせ、メンバーのうち十七人は

「前尾退陣要求」の連判状にサインしたと伝えられた。

こうした動きに対し、前尾は「私は佐藤首相にだまされたとは思っていない。首相が私に（内閣の自動継続を）言う以上は、川島副総裁や田中幹事長とも話した上のことだろうと思った。首相がああいう措置をとった原因を慎重に考えなければならぬ」と言うだけで、多くを語らなかつた。古参議員の間からは、「これは人事見送りに対する不満表明をきつかけとした、大平系若手の造反、一種のクーデターではないか」と、逆に中堅・若手の動きを警戒する空気も生じ、宏池会には中堅・若手と古参組の間に疑心暗鬼が充満する状況となつてしまつた。

若手の不満は大平にむかつた。田中六助はじめ、浦野、田沢、服部、佐々木、伊東らは大平に対し、「あなたがどう考えられようとも、今度の一件はもつ我慢ができない。われわれ若手はハッキリ決着をつけるつもりだから」との意向を伝え、大平にもそれなりの決意を固めるよう求めた。そればかりでなく、若手の中には、「いま旗揚げをして別のグループをつくれば、大平さんについてくるのは、七、八人かもしれないが、結束して同志を徐々にふやして行く覚悟で立ち上がるべきだ」と大平に前尾派脱退を求めるものもあつた。前尾責任追及の動きにより、同時に大平も出処進退を問われることになつたのである。

しかし大平自身は若手のように直進的ではなく、「君たちの気持はわからんわけではないが、前尾さんには前尾さんの考えがあるだろうから、そう急かさないで……」と若手の自重を求めつつ、鈴木善幸、内田常雄、塩見俊二ら宏池会の幹部と連絡をとつて打開の糸口をさぐつた。大平にしてみれば、池田内閣時代には、くつわを並べるか、ないしは自分が一歩先んじていたはずの田中角栄が、佐藤政権になつて幹事長、蔵相を繰り返してすっかり党内の地歩を向上させ、同時に、岸の秘蔵っ子だつた福田超夫の株も急上昇している。加うるに中曾根も力をつけ、三木も百十一票の重みを示した。それにひきかえ、自分は佐藤政権時代に政調会長、通産相の二役を歴任はしたものの、相変らず前尾派の部屋住みである。あせりの生じないはずはなかつたが、派閥の長の座を力で奪いつつたという印象をあたえるような行動をとることはどうしても気が進まなかつた。

池田勇人の写真の掲げられている宏池会の事務所でキチンと引き継ぐのでなければならぬ”それが大平の心境だつたのである

だが、若手の大平説得も激烈をきわめた。「グズグズしては、いまのリーダーと同じだ。一体、あなたはヤル気があるのかないのか」と迫る若手と大平との間で激論がつづき、ついに大平も「もし打開の方途がないときは、君たちと行動を共にしよう」と決断した。その時のことを田沢は、「私たちの若気の至りが、あるいは大平先生を困らせた場面もあったかもしれないが、最後には大平さんも決断され、一緒にやろうという気になって下さったときの嬉しさは、いまま記憶にあざやかなものがあります。」(『回想録』追想編)と回想している。

この間前尾は、伊東ら若手グループを一人一人呼んで自重するよう求めたが、その勢いはもはや止めることができなかつた。

宏池会の若手が大平の決断を迫り、大平もやむなくその方向に傾いていることを知って、最も心を痛めたのは鈴木善幸総務会長であった。鈴木は、ただちに大平の自重を促すとともに、造反グループの説得にとりかかった。若手の中でも強硬派の数人が呼び出された。

鈴木はこう述べた。

「四十年七月に池田さんの病気が再発して、再入院して手術することが決まった七月二十九日の朝、前尾、大平と私が信濃町(池田邸)に呼ばれた。池田さんは、もうオレの声は出なくなるかもしれない。したがってこれが最後の声になるかもしれないから三人ともよく聞いてくれ。宏池会は保守党のバックボーンだから、これから先も結束を保って、バックボーンにふさわしい政治行動をして行ってくれ。オレに万一のことがあった時は、前尾君を中心にして、大平、鈴木両君は前尾君を助けてやって行ってくれ」と言われた。私はいつもあの池田さんの「遺言」が耳にこびりついている。だから、われわれ池田さんのつくった宏池会の人間としては、いまのような状況はなるべく早く脱却しなくてはならないと思っている」。

鈴木はさらに言葉をついだ。

「そういう観点からすれば、大平君は、宏池会で前尾に次ぐ最も重要な人物だ。大平君を生かすも殺すも、われわれ宏池

会の同志がいかにも彼を盛り立てて行くかではないか。しかるに君たちのやっているのは、大平君を鹿児島島の城山で討ち死した西郷さんにしてしまうようなことだ。いま一番大事なのは、前尾と大平が率直に話し合うことだが、不幸にして二人とも当事者になってしまった。幸い、私は第三者の立場にある。私が二人とよく話し合つて、局面打開の方途を考えるから、諸君は早まらずに私にまかせてくれたまえ」

リーダーの前尾会長にあきたらず、大平の決断 脱会を迫っていた若手も鈴木の説得に耳を傾けはじめ、問題決着にしばらくの時間をかすことを了承した。鈴木は、前尾、大平の間を何度か往復し、宏池会の古参議員らとも話し合いを重ねた。収拾工作が進むにつれて、前尾は、「自分としても重大決意をするのだから、最大限一カ月の余裕が必要だ。重大決意とは、もちろん出処進退を含めてのことだ」と言いだした。

だが、これだけではただ引き延ばすだけで、結論にはならない。前尾の側近が前尾の真意を確かめたところ、「来年八月の池田さんの七回忌をすませれば、自発的に宏池会会長を辞任する」という意向が明らかにされた。これは大平側近に伝えられ、双方の側近が打ち合わせて、収拾案がつけられた。前尾会長はそのままして、その下に五人の委員から成る補佐機関「五人委員会」を置くという中間的な措置である。メンバーは、大平を中心に、鈴木善幸、小平久雄、小川平二、そして参議院から塩見俊二と決まり、前尾の言う一カ月を待たず、十一月十八日に宏池会総会でその旨決定された。

これと同時に、若手の意見の吸収を目的とする「幹事会」の新設も決まった。こつした体制が固まったのを見た前尾会長は、十二月三日、広島市内に建立された故池田前首相の銅像除幕式に出席したさい、「佐藤政権退陣は案外早い機会にやつてこよう」との見通しを示し、改めて宏池会政権への意欲を見せたのである。この段階では、前尾の引退意志は明らかにされなかった。当時、健康状態が思わしくなかったこともあって、前尾は決断を下そうとはしなかったのである。

このような不透明な状況を前にして、大平の心境は複雑だった。みずからの先輩で兄貴分でもある前尾会長にあえて退陣を迫ることは、「クーデター」とも「明智光秀」とも言われかねない。しかし若手の憤懣をいつまで抑えられるか。苦悩を重ねた末の結論は、会長交代の実現までいくら日時がかかるのかわからないが、宏池会は自分が事実上引き受けざる

をえない、ということだった。これについて、大平と個人的に親しく、いわば相談相手でもあつた無派閥の古井喜実は次のように述べている。

「前尾君は、お坊さんか教育者の社会なら極上の人物だが、政界はそんな立派な場所ではない。そこで、何とかならぬかと、よけいなことだが、私も前尾君の家にに向いて愚見を述べたこともある。反対だともいわぬが、のれんに腕押しである。大平君は、しよせんこの仕事は自分でやるほかない。何力月かかっても自分でやるという。これには驚き、かつ感心した。やめるも愉快な話でないが、その上、自分によせはいちばんいやな話である。決して、私心だけでやれる仕事ではない。」(『回想録』追想編)

前尾会長の不分明な態度はつつき、宏池会にはやり場のない空気がみなぎった。春の統一地方選挙が近づいており、このままの体制では戦えないという若手議員のつきあがが激しくなってきた。

大平はこのころ、『日本経済新聞』の求めに応じて、新権力論」という注目すべきエッセイを寄稿した。(『回想録』資料編参照)この論文は、その内容に当時の大平の心境が投影している点で、きわめて興味深い。

まずはじめに、「権力とは何のために必要か」が問われている。

「……権力というものを考える場合にも、権力自体の構造や機能を掘り下げるだけではなく、それを必要とするより高次のものを予定してあるものだという消息を心得てかかる必要があるように思われる。権力というものがそれ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許される……。」

では、その目的は何か。大平は「平和」とか「福祉」と言っても「その内容は必ずしも明確ではない」とし、もっと具體的で、「もっと積極的にわれわれに生きがいをもたらすようなものでなければならぬ」と言う。

だが、現実にはそれを規定することはむずかしい。したがって「権力が考えなければならぬのは、自らのイデオロギ

「に同調と理解を求めることよりは、こういう（イデオロギーに）無関心な厚い層をいかに自らの存在に有益なもの、ないしは少なくとも無害なものにする工夫を通じて、自らの基礎をかためることはあるまいか。」

しかし、大平は、こういう仕事も決して容易ではなく、術策や手段にも限界があるとし、次のように記している。

「……権力にはもつと深い根元的なものがなければならぬ。東洋においては為政の根本を手段に求めずに権力の主体の人格に求めてきた。制度や法の精緻な網に期待するよりも、主体側の徳望に求めてきた。まず己を知り、己に克ち、己を尽くすことが為政の根本であるとされてきた。その消息は、何も東洋の専売特許ではない。西洋の政治思想にもうかがわれるものである。……権力の本体は……権力者自体の自らのあり方にあるのだということは銘記すべきである。術策の分量やその組み合わせの巧拙よりも、権力主体のあつめる信望の大きさが、その権力に本当の信頼と威厳をもたらすものである。アンドレ・モーロアは『他人を支配する秘けつは、自らを支配することを得得ることにある』と言っているが、権力の主体に対する頂門の一針といつべきものである。」（昭和四十六年三月九日付）

これを大平の前尾批判とだけ見ることは当るまい。大平は、自分自身についても自戒のむちを当てていたのである。いずれにしても彼は権力を指呼の間に仰ぐ位置に達する時を前に、悪罵や怒号や嫉妬の中で、このような思弁を文字にしていた。権力という悪魔的なものに無自覚のままつき動かされるのが常とされる政界の中では、きわめて『非凡な』または『変わった』政治家だつたと言つことができるであらう。

古井喜実が述べたとおり、誰が口説いても『のれんに腕押し』のような前尾会長に最終的に退陣を決意させたのは、鈴木善幸と財界の桜田武だつたと言われる。前尾自身はのちに「四十五年春の京都府知事選で自民党が負けた時に一旦、退く決心をしたことがある。しかし、ハッキリ覚悟を決めたのは、四十六年二月の京都市長選で他党の代議士を棒にふるって出てもらつた永末英一氏が負けたときのことだ」と述べているが、つづく三月、前尾会長に会つた鈴木が次の総裁選を戦う決意があるかどうかと真意をただしたさいにも、前尾の答は明快ではなかつた。そこで鈴木は「宏池会は池田さん以来、

保守党のバックボーンとして総裁のポストを目指す総裁派閥であるはずだ。それならば、大平君にバトンタッチされるべきである」と強く進言した。

同じころ、桜田武も前尾に会い、同様に大平への交代を求めている。この時のことを、同席した財界人今里廣記はこう記している。

「前尾氏から大平氏への宏池会のバトンタッチの話し合いは、築地の栄家で行われ、たまたま私もその場に居合わせた。桜田さんは前尾さんに次のようにあいさつした。『われわれ経済界に身を置くものは、後継者を事前に決めておくものです。宏池会は池田勇人以来、立派な人間集団として伝承されてきた。この大事な会を、いかに責任をもって運営していくべきか、われわれ関係者も関心を持っています』。こう述べたあと、桜田さんは核心に迫っていった。『後継者に、大平さんではどうですか』。前尾氏は慄然とした様子だったが、この一言がすべてを決定した。」（今里著『私の財界交友録』）

こうして、半年にわたる曲折の末、ようやく話し合いは落着いたが、発表は統一地方選挙後に延長され、昭和四十六年四月十七日、前尾、大平の会長交代は実現した。ここに大平は苦難の多かった宏池会ナンバー2の座からリーダーの座に移り、いわば総裁選出馬への第一歩を踏み出すわけである。当日の『朝日新聞』夕刊は、「これで旧池田派から前尾派と続いた宏池会は、そのまま大平氏指導の下に衣がえし、ポスト佐藤に向けてスタートすることになった」と報じた。

前尾 大平バトンタッチの場となったこの総会では、まず前尾会長が「伝統ある保守本流としての使命を持つが派は、政権担当の集団としてさらに躍進を図らなければならない。新リーダーを決め、新体制を整え、私の果たしえなかつた目的達成のため前進してほしい」とあいさつ、会長を退く意向を表明した。大平は全会一致で後任の新会長に決まったが、長老の小坂善太郎は「吞舟の魚は支流に游がず」という吉田元首相の好んだ中国古典『列子』の言葉を引用して、「これからの宏池会は保守本流の主流を歩まなければならない」と述べ、福永健司は、「この交代をきっかけに、何としても昔の宏池会にか

えらなければならない」と、それぞれ大平新会長を激励、宏池会の新生に期待をかける会員の気持を代弁した。

大平新会長のあいさつは、長い年月の曲折のあとにしては簡明なものだった。はじめに前尾前会長のこれまでの指導に謝意を表明し、前尾を宏池会の名誉会長に推戴することを提案したのち、次のように述べた。

「今回の会長交代は、宏池会にとって、結成以来、最大の危機をはらんだものでありました。この重大な局面に処して福永、小坂両氏をはじめ幹部各位は、周到な英知と情理を傾け尽くされて、同志の間を奔走され、幸いに局面を打開することができたばかりでなく、難局を転じて結束強化の契機にまで高めることに成功したのであります。要は信を腹中において相互信頼の強化と活発な同志間のコミュニケーションの展開を通じて、（前尾氏がいま示した）道標に向かって、一歩邁進するのみであります。」（『回想録』資料編参照）